

第1章

総研大レクチャー「博物館とは何だろう」

小島 道裕

総研大文化科学研究科・国立歴史民俗博物館教授

はじめに

博物館は、展示を通じて学術研究の成果を社会に表し、共に考える場を提供する機関である。そこには、そのためのさまざまな方法や、それを支える理論があり、これについて理解を深めることは、今後博物館で活動を行う場合はもちろん、科学とコミュニケーションの問題を具体的に考える上でも、大変有効であると思われる。

このような趣旨で、日本歴史研究専攻では、夏の集中講義の一つとして「博物館とは何だろう」を開催し、「総研大レクチャー」として、広く全学と学外にも公開している。以下、この試みについて紹介してみたい。

1. 目的と対象

この講座は、三つのコースから成る「日本歴史研究の方法」のひとつ（Cコース）である。他の二つは、A「資料調査法」と、B「地域調査の方法」で、Aは、国立歴史民俗博物館（以下「歴博」）の所蔵資料を用いて、考古学・文献史学・美術史学・分析科学などの様々な観点から、調査と活用の方法を学ぶもの、Bは、実際のフィールドにおいて、歴史・民俗・考古などのさまざまな資料を現地に即して調査し、活用する方法を学ぶものである。

C「博物館とは何だろう」は、歴博の展示と活動を通じて、特に利用者

とのコミュニケーションの側面について、博物館展示の持つ意味と機能について学ぶことを目的としている。

いずれも7～8月に三日間をかけて行い、履修者には1単位が与えられる。

対象とする学生およびそれぞれについての意味については、次のように考えている。

- ① 日本歴史研究専攻学生(集中講義＝実地訓練と学際性・社会性の涵養として)
- ② ①以外の文化科学研究科学生(専攻横断教育プログラムの一つとして)
- ③ ①②以外の総研大学生(全学教育プログラムの一つとして)
最先端の施設と活動を行っている基盤機関を訪問し、それを利用して学ぶ機会を作る。
- ④ 他大学の歴史系博物館に関心を持つ学生(博物館における実習の機会として)

学界の共有組織であり、当該分野を代表する立場にある基盤機関(大学共同利用機関)を訪問し利用する機会、およびその教員と共に学ぶ機会を学生に提供する。

なお、学生に限らず、関心を持つ社会人の参加も認めている。

2. 概要

以下、Cコース「博物館とは何だろう」について述べると、2009年度の場合を例に取れば、担当者とスケジュールは、以下のようなものであった。

担当教職員：

日本歴史研究専攻	小島 道裕・教授(中世史／博物館教育)
	村木 二郎・准教授(考古学)
	小池 淳一・准教授(民俗学)
	石渡 芳樹・歴博資料係長

日程:

2009年8月5日(水)

- 9:30～10:00 日程説明・ワークショップ①「記憶の中の博物館」
小島
- 10:00～10:40 講義「歴史展示とは何か」小島
- 10:50～12:20 展示解説(古代)村木
- 13:20～13:50 講義「歴博の教育活動」村木
- 13:50～15:50 展示解説(中世他)とプログラム実践 小島
- 16:00～17:00 バックヤード見学 (案内:石渡)
- 17:30～17:30 まとめ

8月6日(木)

- 9:30～11:00 展示解説(民俗)小池
- 11:10～14:30 展示室でワークシート体験
- 14:40～17:00 講義・実習「教育プログラムの制作」小島
- 17:00～17:30 まとめ

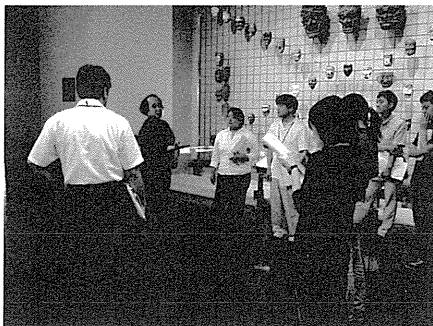
8月7日(金)

- 終日 ワークショップ②「展示を素材とした教育プログラムの制作」小島
- 9:30～14:00 プログラム制作(グループ)
- 14:00～15:00 プログラムの試行
- 15:00～16:00 意見交換
- 16:00～17:30 プログラムの修正 まとめ

歴史展示論などの講義、博物館経験を語り合うワークショップ、担当者による展示解説、プログラム体験などを行い、さらに実際に展示室を用いて展示と観客をつなぐプログラム(主にワークシート)を考案する、というのがおよその流れである。

まず、自己紹介を兼ねて、自分の過去の博物館体験を振り返って、利用者として見た博物館とその印象や問題を再確認する。

続いて講義において、博物館側が考えている展示の意味、すなわち、歴史展示とは「正しい知識」が前提にあつてそれを伝えることが目的なのではなく、利用者が、展示の場で資料を読み解き、意味を引き出すことによって、自らの歴史像を形成することが目的であること、博物館はその場を用意し、手助けをする存在であり(注)、学芸員は「教える」のではなく「一緒に考える」という立場に立つこと、といった基本的なコンセプトを語る。



担当者による展示解説は、受講者の反応が最も強い部分であり、展示を作る側の意図を聞きながら展示を見ることによって、そこに盛り込まれた意味が理解できるようになり、展示を身近な、自分のものとして見られるようになる。また、バックヤードを担当者の案内で見学することによって、博物館における資料の保存管理の現場を体感する。

その上で、では、実際の利用者に対してどのような支援を行ったらよいかを考える。利用者は大変多様であり、博物館側は、年齢、資質、知識などによって考慮した多様なプログラムを用意していることを理解・体験して、最後は、グループに分かれて、自分たちで展示を用いたプログラムを制作・発表し、他の受講者および博物館の教職員から批評を受ける。

3. 参加者と効果

参加者の数や所属等は、年によって異なるが、日本歴史研究専攻学生の他、学内の他専攻、ないし外部からの参加が常にあり、総研大レクチャーとして有効に機能している。

他専攻の学生としては、文化科学研究科の他、複合科学研究科、生命科学研究所などの理系の専攻からも参加者がある。社会人は、博物館

の学校教育での利用に関心を持つ教員が主である。

受講中の発言やレポートを見ると、博物館の、「正しい知識を伝える」のではない、という発想や、それを具体化するためのさまざまな工夫に、異文化ショック的な反応を見せることも少なくない。また、さまざまな専門分野の学生がグループでひとつのプログラムを考案・作成することは、互いの専門の発想に刺激されることも多いようであり、これらの点で良い効果を挙げているとすることができる。

最後に、実際の事後レポートから、参加した学生の感想を少し引用させていただくことで結びとしたい。

「・・・ 以前は歴史研究を、神話や言い伝えをそのままに受け取って良しとしてるような、ある意味安堵とした研究の様子を想像していました。しかし、本レクチャーのプログラムをこなすうちにいかに展示物をよく見せるか→いかに展示物に語らせるか、という視点につながり、そこからそれがいかに大切か、という博物館側の視点が自分に導入されていることに、いつしか気付き始めました。さらに、小島先生の言葉「歴史研究も数学や物理学とそんなに違わない」をレクチャー後しばらく反芻していて、後になって気付いたことですが、事実の確認の仕方が数学や物理学に似ていることです。つまり、みんなが納得/共有できる仮定を前提にした上で、分析なり調査した結果を論拠に、正しいことを説明するというやり方がどちらにも存在するという事に気がつきました。・・・」(情報学専攻Mさん)

「・・・ 博物館とはあるテーマについての事物・資料を収集して、それらについての研究がなされた上で、来館者が理解できるように解説をつけて展示する場所であると理解していた。つまり、ものの展示を通し、研究成果を具現化することでその理解を広く普及することが博物館の役割であると考え、博物館は知識を得られる場所というイメージのみが先行してしまっていた。

(中略)

レクチャーを通して、博物館の役割を確認すると同時に、その役割を果たすために何が問題となり、それを解決する上で、どのような工夫がなされているのかということを知ることができた。博物館という空間では、人が人に直接何かを教えることは少ないため、展示物を観察し、また、それについての説明に目を通すことでのみ学習が成立することになる。言い換えれば、博物館での学習では来館者に展示者や研究者の説明は良くも悪くも伝わりにくくなっているため、観察を通して得た情報から自分自身で考え、何らかの結論を導き出す訓練ができる場として博物館を利用することができる。博物館を教育の場として最大限に活かすためには、できるだけ自由な思考の妨げとなる主観的な解説や誤解を招きそうなデザイン・空間設定を取り除く一方で、「見る」、「理解する」、そして、「考える」ということを楽しめるように道しるべを多く立ててあげることが最も重要であるに違いない。つまり、博物館＝知識の宝庫ではなく、博物館＝ものを考える場所というイメージを一般に浸透させると同時に、ものを考えることの楽しさを知ってもらうことこそ、博物館の教育的役割であると思う。・・・」(生理科学専攻Kさん)

「・・・ワークシートとはゲーム要素の強い、その場限りのものという印象が強かったが、内容や方法次第で展示に目を向け、新たな視点を獲得できる可能性を持った教材であることに気付かされた。自分達の内にある素朴な疑問を熟成し、「問い」に昇華する。その問いを自覚し、答えを自らの力で導きだす。そのための補助ツールがワークシートであり、その制作から実施までの全体的に構想することが教育プログラムには求められる。しかし、理想的な教育プログラムを企画するのは容易ではなく、基本的なコンセプトが明確であることはもちろん、対象とする展示だけではなく、観覧者に関する情報も必要であると痛感した。また、何かを制作するという事は自己満足に陥り、作る事自体が目的化しやすいことをまざまざと思い知らされた。何のために、誰のた

めに作るのか。これは、展示制作においても反芻すべき問題であろう。…」(日本歴史研究専攻Sさん)

「…「展示する」ということについては、今後ますます注目される分野になると考えている。博物館のみならず、美術館、水族館、動物園など、様々な展示において、より趣向を凝らし、より参加者の興味を喚起し、展示物の魅力を発揮するような工夫が生まれてくるだろう。コレクションを持たず柔軟な展示を目指す国立新美術館、行動展示で有名となった旭山動物園などは良い実例で、このような変化は様々な場所で続いて行くと思われる。

しかし一方で、物理的な展示スペースの限界や、予算の確保、展示物の維持管理など、現実的な問題点も抱えていることも分かった。これらの問題にいかに対処し、魅力的な展示を実現するか。一見困難そうな課題であるが、根気強い予算獲得の裏で、収集物の詳細な情報・特徴を漏れなくシステム管理して効率化し、展示物の魅力を十分に理解した研究者の意図を汲んだ、的確な視覚化をコンピュータの機能を借りて実現していくことで、解決可能であると考える。この実現にあたって、国立研究所同士の横のつながりは、非常に大きく貢献するだろうと思う。

今回のレクチャーはとても勉強になりました。そして、博物館展示を、情報技術を使って活性化していきたい、参加者に生き生きと伝えて行きたい、という思いをさらに強くしました。是非今後の研究に役立てたいと思います。…」(情報学専攻Fさん)

(注)

歴博の初代館長であり、その構想をリードした井上光貞は、開館前にすでに次のように述べている。

「歴博はただ、人々が自分の歴史像をえがくための産婆役であることにこそ、積極的な意味がある。」(井上「国立歴史民俗博物館の構想」『文

化庁月報』118号、1978年。『国立歴史民俗博物館十年史』所収)

今日博物館教育で主流となっている構成主義的な考え方をいち早く表明したものであり、その先見の明は高く評価される。しかし、当初はそれをどう実現するかノウハウが十分でなく、観客主体の展示の工夫や、プログラムの考案・実施を積極的に行うようになったのは、比較的近年のことである。この講座では、その点を参加者と共に考えている。なお、この問題については、小島「展示を学習の素材(リソース)とするには」(2004年10月6日 ICOM / CECA 2004 SEOUL)などでも述べており、歴博ホームページの小島のページに掲載しているので、ご参照ください。(アドレスは下記)

http://www.rekihaku.ac.jp/kenkyuu/kenkyuusya/kojima/icom_j.html